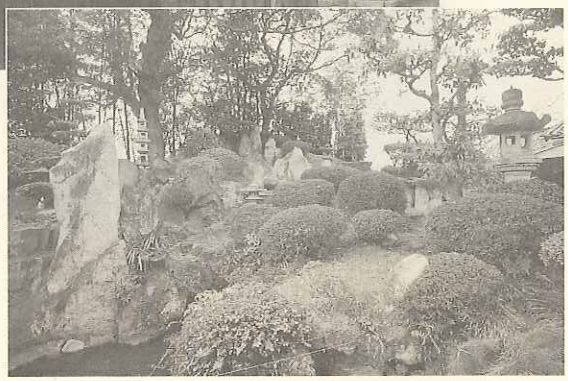
近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぽう
三方よし

第31号
2008／3

CONTENTS

近江商人の足跡を訪ねて　紅花の流通と近江商人　2
講演「山形の近江商人」　榎森伊兵衛　6



「お助け普請」として建てられた藤野四郎兵衛の屋敷「豊会館（又十屋敷）」（上下）と近江日野商人館として公開されている山中兵右衛門旧宅（左）

近江商人の不況対策 —お助け普請—

サブプライムローン問題や原油価格の高騰、円高、日銀総裁人事をめぐる政治的混乱などで日本経済は今まさに苦境に陥っています。経済がグローバル化したことで私たちは様々な恩恵を受けていますが、逆に一つの国で起こった不祥事や不利益もまた、全世界に影響を及ぼすようになりました。今ほど、先人の知恵と倫理が必要とされている時代はないのではないでしょうか。

近江商人の活躍した江戸時代も、当然ながら経済の大きな変動がありました。とくにこの時代は、天候や自然災害によって、景況が大きく左右されました。そんな中で、近江商人は独自の不況対策を行ってきました。それが「お助け普請」です。飢饉や不況などが起こった時に本家の屋敷を建て直したり、修理を行ったりすることを言います。こうした時には当然のことながら、多くの職人や日雇いの労働者が雇われることになります。周囲が困窮している時期に敢えてぜいたくとも取れるような改築を行うことで、雇用を創出し、地域の経済活動を活性化しようとしたのです。

旧中山道沿い豊郷町にある豊会館（又十屋敷）は、もともと北海道の開拓に活躍した近江商人、藤野四郎兵衛の屋敷でした。建てられたのは天保７年（1836）で、ちょうど天保の大飢饉の真っ直中。東北の冷害や浅間山の大噴火などの災害で米価が高騰し、日本各地で餓死者が多数出たほか、百姓一揆や打ちこわしも頻発しているというような時期でした。そんな折り、藤野四郎兵衛が贅沢な屋敷や庭園を造り始めたという話が彦根藩の12代藩主、井伊直亮（なおあき）の耳に入りました。直亮は激怒して奉行をさしむけたところ、普請の現場では多くの人が雇われて賃金が支払われ、家族の分まで食事が与えられていて逆に直亮を感心させたということです。

不況時の経済対策としては、アメリカのルーズベルト大統領が行った「ニューディール政策」がよく知られていますが、これと同じような対策を民間の立場で行っていたのが近江商人の「お助け普請」だったのです。

近江商人の足跡を訪ねて

紅花の流通と近江商人

北前船で栄えた酒田。山形県村山地区で栽培された紅花は、南北に走る最上川の舟運によって酒田に集散され、そして上方へと運ばれた。そしてまた、北の恵みもここ酒田に集まり最上川から内陸に運ばれた。酒田には年間一〇〇〇艘余りの北前船が寄港し、大いに栄えた。こうした物流は、諸国産物回しを展開した近江商人の活躍があったとされる。どの時期にどのような事業を行ってきたのかを知りたく、三方よし研究所の有志で山形を訪れた。

高さ6メートル以上の中村喜兵衛宅の蔵

山形十日町の近江商人

株式会社丸太中村の中村喜兵衛家

山形訪問の事前準備のため、さまざまな手がかりを求めた。しかし、地元で近江商人について研究している人になかなか見つからず苦慮していたとき、「城下町やまがた探検隊」というボランティアの方の散策マップに近江商人中村家の紹介があった。そして探検隊のみなさんのご尽力で、普段は非公開の中村家を見学できる機会に恵まれた。先代は山形県滋賀県人会の会長をされている中村喜兵衛さん。そしてご子息で現社長の中村千春さんが、敷地内の蔵や旧店舗をご案内くださった。

近江屋と大きく書かれた入り口のガラス戸が印象的な構えの商家に入ると、かつての商いの喧騒が聞こえるような感じを受けた。取扱商品が大きく書かれた店内の看板には、近江商人の代表的な扱い商品がならび、商いの歴史を伝える。中村社長が幼少の頃には店には畳が敷かれていたというが、㈱丸太中村は、今は流通センター内で砂糖など菓子の原材料を納めている。

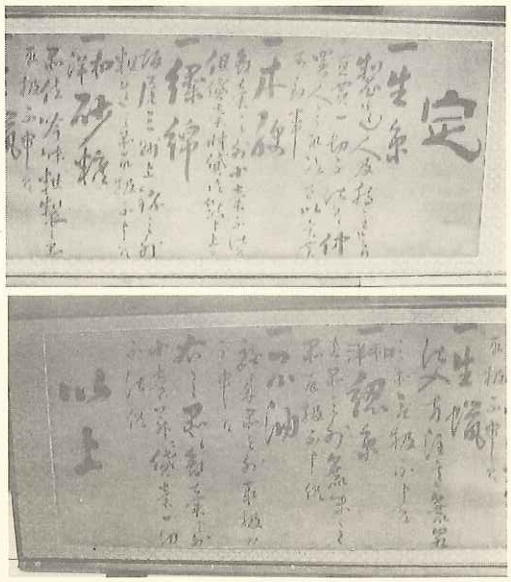
中村喜兵衛家の初代は近江八幡倉橋部村（現近江八幡市倉橋部町）の村地定右衛門家出身で定八といい、山形の十日町南部屋中村家の養子となって中村姓に改めた。四代より林兵衛と称したが、林兵衛の三男久兵衛が分家してその子茂吉が幼少の頃より行商に励み、長じて本家の祖喜兵衛の名を継ぎ今に至るという。

中村家のある十日町は、延文元年（一三五六）に山形城主になった斯波兼頼がここに市を設けた場所であり、今に伝わる初市は当時の名残という。江戸時代には近江商人の商家が多かったが、現在では、中村家のような蔵店のある商家は次第に姿を消している。案内いただいた「城下町やまがた探検隊」は、こうした伝統的な蔵店の再生に立ち上がり、その結果何軒かが、蘇った蔵で新しい形態の商いを行っている。リーダーの新関さんも蔵づくりの店舗を持つ漬物屋さん。後述するが当日ご講演いただいた榎森さんは、新関さん製造の「おみ漬け」を持参され、講演の前に一同に披露、賞味させていただいた。

山形の西谷家の系譜と初市

当日の講演会場は、探検隊が

十日町に面して建つ丸太中村の全景



丸太中村家に残る扱い品目の額
生糸　木綿　繰綿　和・洋砂糖　生蝋　綛糸と記される

ご案内いただいた中村千春社長ご夫妻

中村家旧店舗の入口「近江屋」が残る

再生した「オビハチ」という蔵。この会場から中村家への移動中、近江商人の系譜に連なる西谷さんに偶然出会う。十日町界隈には、多くの近江商人の店舗があったところで、取引はじめの祭礼が行われた市神さまのご神体の前に西谷伊兵衛、西谷清兵衛の店があった。

ところで西谷家の系譜は山形に縁が深く、『近江八幡町史』によると「貞享三年（一六八六）に山形に出店した記録が残る」と記される。山形十日町の大十印西谷伊兵衛店は、五代目の活躍で別家、分家が進みその後、福島にも出店している。西谷善太郎店は「大十」と称し、西谷金兵衛家は近江八幡浅小井（あさこい）の出身で醤油、味噌を扱っていたらしい。

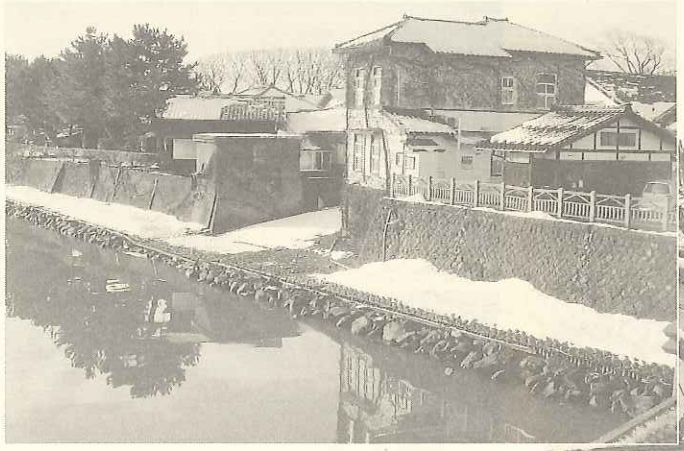
山形市内に「丸十紅花味噌」「マルジュウ醤油」の醸造元の「丸十大屋（まるじゅうおおや）」があり、社長は佐藤利右衛門さん。ここにも重厚な蔵店が残り、元は最上家の家臣でその後紅花商人になり、現在に至る歴史のある家系である。山形に出かけた近江商人が地元の豪商佐藤利右衛門家、佐藤利兵衛家とともに紅花の商いを行っていたといい、これらをルーツとして、「丸」「大」「十」が付く老舗が多い。今回、聞きそびれたが、近江商人、山形商人のルーツ調査のキーワードといえるのではないだろうか。

近代洋風建築と蔵店

ご案内いただいた探検隊の方は、藩政時代以降の歴史遺跡保存に熱心で、さまざまな山形城下町の事情をご紹介いただいた。山形城跡から十日町にかける地域には、旧県庁の文翔館、山形郷土館など重厚な近代洋風建築とともに、教会や写真館、理容店などの瀟洒な近代洋風建築が散在する。戦災を受けなかったことで現存しているのであるが、保存に熱心なことは言うまでもない。近代洋風建築と江戸時代以降の蔵店様式の商家が調和している。その後訪問した山形デザインハウスでは、当地の伝統産業の中にモダンなデザインが生かされている工芸品が並んでいた。

「おみ漬け」と最上（もがみ）の殿様

近江と山形との関連で最も有力だったのが「おみ漬け」であった。「近江漬け」から「おみ漬け」になり、近江商人が伝えたという由来はよく知られている。そして初代殿様の最上家もこの土地の人の誇りであり、最上家ゆかりの文化財や史跡が大



酒田の旧港。山居倉庫裏にあたり日本海に通じている

紅花商人堀米家の旧宅が紅花資料館として公開（河北町）

切の保存されていた。

近江に残る最上※踊りについて「文化財になっているのか」などの質問が出てきて、返答に窮した次第。最上家は、山形城下をはなれ、東近江市大森に移り幕末を迎える。そしてご子孫は大森に在住されているという。

「最上踊り」

東近江市大森町・尻無町に伝承されている郷土芸能。300年以上の歴史があり、滋賀県無形民俗文化財に指定されている。天禄8年（1695）に最上義智公の叙位を祝い藩の繁栄を祈って踊り始めたものと伝わり、明治維新前は、旧暦3月3日に領内の若者が城主の御覧を賜ったが、明治時代以降は鎮守の神社の祭礼で奉納している。最上氏が近江に来たとき同時に伝わったものと考えられる。

摘み取られた紅花は写真のような紅餅として出荷された（紅花資料館）

紅花と近江商人

河北（かほく）町の紅花資料館

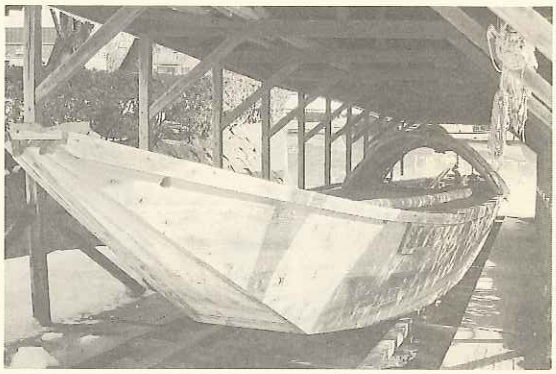
山形市の北西、河北町は「冷たい肉そば」が有名だが、時間の都合で賞味できなかった。とにかく駆け足だったので仕方はないが心残りのひとつ。この河北町一帯は「紅花ロード」と名づけられ、山形きっての紅花栽培が盛んなところで、紅花商として財をなした堀米家旧宅が河北町の運営で紅花資料館として公開されている。深い雪の中、堀をめぐらした武家屋敷のような長屋門をくぐって館内に入る。江戸末期には農兵を組織しただけに武器などを保管した武者蔵が残る。敷地内に新しく建設された「紅の館」には、紅花の歴史、栽培、紅花の価格や紅花の輸送などの説明とともに、京から持ち込んだ多数の雛人形が展示されている。ところが当地の豪商堀米家の歴史が中心なため、ここでも近江商人の事跡の詳細は見つからない。

「紅花を京に運んだ近江商人のことが知りたいのですが」とお聞きしても「そうですかご遠方からどうも」という返事。かなり期待していただけに残念ではあった。資料館の解説の中には山形に京雛が多いのは「紅花商人が、紅花を京に運び、帰路京の雛、古着などを持ち帰る『のこぎり商法』をおこなったからである」とされている。これが「近江商人だったのだ」とさけびたかったが、どうしたことか現地で紅花の流通過程に近江商人の存在を伝えるものがみつからない。不思議に思っていた時に思い出したのが、河北日報に掲載されていたという資料である。

東北の原始的資本の蓄積を妨害した近江商人

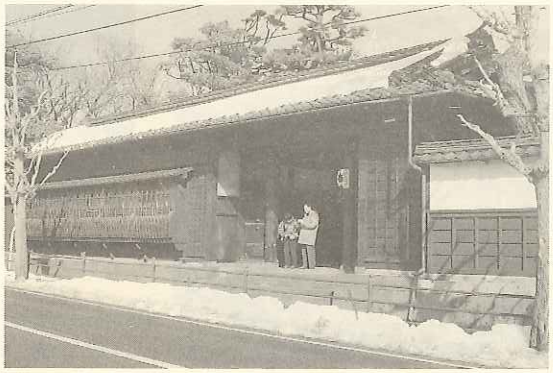
それは、昭和三十年頃に河北日報で連載された近江商人に関するもので、近江商人が東北の流通に貢献していることを記しながらも、「近江商人が固く藩の権力と結託していたことが、どんなに東北の原始的資本の蓄積発展を妨害したかしれない」とし、「東北における近江商人の経済活動は、国産品による利益を吸い取った」と厳しく非難していたのであった。

かなり以前に書かれたものではあるが、「近江泥棒」といわれた所以なのであろう。近年は近江商人の諸国産物回しの商法が正しく理解され、他国商いに



旧酒田港に展示されていた「小鵜飼船」

酒田市内にたつ近江屋三郎兵衛旧宅を示す道標。芭蕉は酒田に十数日逗留し、句会を催し、三郎兵衛宅でも発句。三郎兵衛は玉志の号を持つ俳人



豪商本間家。三代光丘が幕府巡検使一行の本陣宿として明和5年（1768）に新築し、庄内藩主酒井家に献上後、拝領。戦国旗本の格式をそなえた長屋門構えの武家造りの奥は商家造りとなっている。三代光丘は千石船による商いを始める一方で農業振興に尽くし、永年にわたり砂防林の植林に心血を注いだ

ついても「世間よし」の精神を旨としたことへの理解が深まっているが、さまざまな見方があるのはやむを得ないと思う。藩主の多くは近江商人を排斥しなかったと聞くが、庶民の感情としては許しがたいと思ったこともあったのかもしれない。

北前船がもたらした上方文化の香り「酒田」

江戸時代、「紅一匁金一匁」（できあがった紅は同じ重さの金の価値がある）といわれたという。山形盆地の内陸部で栽培され、陸路大石田に送られ、最上川を通じて酒田へ、そして北前船で上方に入った。北前船の往来で賑わった酒田には、豪商で有名な本間家や『日本永代蔵』に登場する回船問屋「鐙屋旧宅」を見学した。そして、偶然にも「近江屋三郎兵衛宅跡」と描かれた道標を発見。

酒田市観光協会が設置している「奥の細道」の足跡を示すもので、芭蕉一行が十数日、酒田の医師伊東玄順（淵庵不玉）宅に逗留したという。道標に書かれた近江屋三郎兵衛は、不玉と俳諧の仲間で「玉志」という号を持つ。そして玉志宅では、「初まくわ　四つにや断たん輪に切らん」という即興の句が作られた。近江屋三郎兵衛も鐙屋同様に回船問屋であったのだろう。おそらく何軒かの近江商人がここで活躍していたことが推察される。三郎兵衛旧宅は交差点に接し、現在は証券会社が建つ。

酒田での滞在時間は僅かであったが、定番の「山居倉庫」や旧酒田港を見学。夕食には酒田観光協会の冬のイベント「寒鱈と地酒」まつり協賛の料理屋で、厳寒の日本海の幸「寒鱈なべ」を食する。日本最古の木製灯台が残る日和山公園近くの趣のある料亭の大女将、若女将の心憎い歓待ぶりに満足する。北前船で上方文化が伝来した影響は、京雛とともに料理の味付けもすっかり関西風である。江差と同じようにここ酒田にも上方文化が深く根付いている。物流と同時に文化をもたらした北前船であったことを再確認した。

日本永代蔵に書かれた回船問屋「鐙屋」の祝い幕

大河ドラマの準備が進む米沢市

最終日は、山形の南の米沢を見物。米沢の冬の風物詩「雪灯籠まつり」の翌日ということで、上杉神社周辺は昨夜の祭りの余韻が残り、上杉神社境内参道の両脇には雪灯籠が立ち並んでいた。武田信玄と壮絶な戦いを行った上杉謙信、そして大胆な財政改革をおこなった上杉鷹山の人気は高く、来年の大河ドラマへ市民の期待は大きい。すでにまちをあげての歓迎準備が進められている。

駆け足ではあったが、長年の懸案であった山形に出かけられたこと、探検隊のご案内でなにかしらの道筋が見つかったことなどは大きな収穫であったが、まだまだ奥深い山形での近江商人の事跡。さらに核心的なことが知りたいものである。

山形の近江商人について語る井筒屋
10代榎森伊兵衛さん

城下町やまがた探検隊のみなさんに
よって蘇った蔵「オビハチ」

講演「山形の近江商人」

井筒屋第十代当主　榎森　伊兵衛　氏

近江商人の精神を伝える山形名産「おみ漬け」

山形の歴史を語るとき、近江の存在なしでは語れないのが本筋です。しかし、山形藩は城主が次々替り、系統だった資料が少なく、近江商人に関する資料も非常に乏しく詳細については滋賀県の情報を頼っているのが実情です。

山形の初代藩主は最上家で、石数が五十二万石でしたが、近江蒲生郡に遷され、最後には五万石に減ります。しかし最上家の存在が山形に近江商人がやってくることと大いに関係がありました。山形名物の「おみ漬け」という漬物は「近江漬け」がおみ漬けになったといわれ、いまでは唯一近江商人とのご縁を語ります。元来、単身赴任の近江商人の商家で食されていたものと伝わり、市内に流れる堰に溜まった菜っ葉などを拾い集めて漬物にしたということで、近江商人の始末、倹約の精神の象徴といわれます。

近江商人の三方よしの教えは、ほかの国へ行ったら、その土地の人のことを第一に考えて商いをし、自らの利益を還元しなければならないということで、現在でいう企業の社会性と言えるでしょう。昔から考えていたということは素晴らしいこと思います。

最上家と近江商人

近江商人が山形に来た理由としては、文禄年間の豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に、山形藩主の最上義光が近江に五千石の耕地（まぐさば）を拝領したことが始まりといわれます。私どもの先祖の井筒屋榎森家も当時、運送業のようなものを行い、兵站（へいたん）に従事していたようで、山形に来て運送業と両替商を東北電力の角のあたりで行っていたようです。その後、酒屋をはじめました。

初代藩主最上家近江へ

慶長十九年（一六一四）に最上義光が六十九歳で亡くなります。お家騒動によって、ここが没収され、元和八年（一六二二）に最上義光の孫の義俊が、近江と三河の一部を併せた、わずか一万石に減封されました。さらに寛永八年（一六三一）には三河の五千石も召し上げられ、明暦元年（一六五五）、義光の孫がはじめて江戸城を去り近江の蒲生郡玉緒村大森に居を定めます。ここには、鳥越家、高橋家、柴橋家、鈴木家の子孫の方が現存していると聞いています。

山形の近江商人群像

山形に一番早くやってきた近江商人が大十（屋号記号）の最上屋西谷善太郎家だとされます。「十日町宗門帳」に出てくる十日町佐藤利兵衛家は、最上家の家臣で最上がつぶれたときに帰農しましたが、この佐藤家に近江八幡のヤマヤ西谷伊兵衛が手代甚兵衛ほか九名、そして、西谷清兵衛が手代十一名で佐藤家の店を借りて紅花や青苧（あおそ）を買って近江に送り、近江からは蚊帳や古着を山形に持ち込み、仙

台や相馬で販売しました。

また、蒲生郡の村井清七は、大蕨（おおわらび）の稲村家と婚姻関係があり、最上川の舟運を牛耳って紅花・青苧を出荷して、上方からは綿や蝋、砂糖を持込み、山形のほか、伊達（宮城県）や相馬（福島県）へ商いをして地盤をつくりました。現在の十日町の村井家につながる家系で、現在の山形交通や殖産銀行の創始者です。

近江屋丸太中村喜兵衛家は、文化年間（一八〇四～一八一七）に近江屋林兵衛家から分家しています。近江屋林兵衛は、現在の近江八幡市倉橋部の人で、大十（屋号記号）西谷の手代として山形に来て、南部屋の中村庄右衛門に婿入りしました。呉服、染物、太物などを扱っています。中村林兵衛家はなくなりましたが、鳥海山（ちょうかいさん）両所宮の社殿前の灯籠にその名が刻まれています。味噌・醤油などを扱った西谷金兵衛家、呉服、蚊帳を扱った彦市の阿部彦太郎家、七日市で油を売っていた水口九兵衛家があります。水口家は、現在のマクドナルドのところの角の場所です。大変な豪商でしたが、享保年間に堀田領主の忌諱に触れて山形城下から追放されて天童で成功しています。

不思議なことですが、この頃になると、近江商人たちのなかでも八幡商人たちは、自分たちの権利がなくなることを懸念して日野商人が出てくるのを阻害します。八幡商人のほとんどが御用商人だったので、堀田氏は、これを忌諱に触れてということで天童に追い出しましたようです。

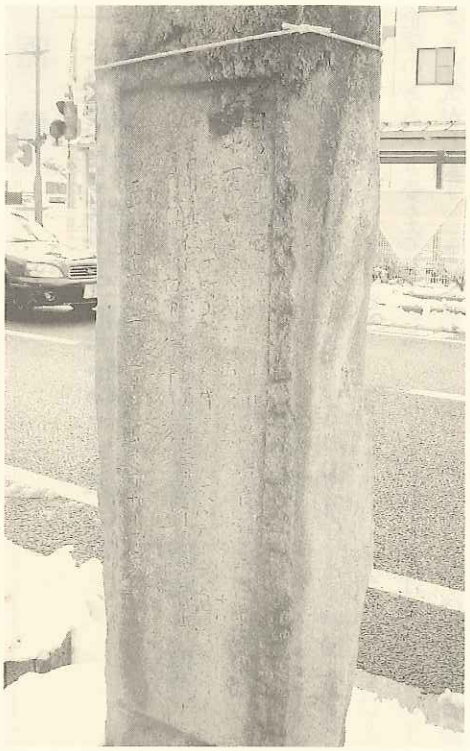
近江商人は、しだいに血族から分家する一族分家や、奉公人が年季明けの暖簾（のれん）分家などによる商家の増加や、優秀な近江商人を婿入りさせるなど、だんだんと婚姻関係が増えて、山形に近江商人が入ってきます。そして、近江商人の生きざまや生活様式、商売の技術などが山形のなかに根付き、今度は、まわりの人間たちが見習います。そうしてここに山形商人の意識が確立してきました。山形では藩主が次々替わったので、商人は自立自営の精神で販路を広げます。山形から仙台そして秋田へと広がったのです。

山形での商い商品

山形の県花となっている紅花の生産を奨励したのが近江商人でした。紅花の全国生産高が千駄程度でしたが、最上が四百五十駄、仙台が二百五十駄、福島が百二十駄という具合です。米に比べ高価な紅花の栽培は増加し、一方で武士の礼服などの衣服の原材料の青苧の栽培もおこなわれていました。山形の青苧はたいへん質がよく、村山盆地の西の出羽丘陵で主に栽培されており、徳川時代には有名な麻の産地の近江へ運ばれました。

当時の輸送手段として舟運が主流で、最上義光によって大改修されて以来、最上川が物流に大きな役割を果たしました。最上川から酒田へ、さらに上方へと紅花や青苧が運ばれたのです。安政年間の記録では上方から酒田に年間三千艘が来たとされます。最上の舟運の中心として栄えたのが大石田で、山形より賑わい、松尾芭蕉も立ち寄っています。

近江商人たちは、この土地で私たちに商いの道のあり方、考え方を残してくれました。山形の商人は、「勤勉にして忍耐力に富み、機略・敢為（かんい）の特質を有し、時期に投ずる」と言われています。勤勉、忍耐については東北の風土的なものですから理解できますが、機略、敢為という特質は、近江商人の商法を直接、間接的に受け継いだ財産ではないかと思います。機略は、ときに見合ったはからいごとであり、敢為は、ものごとを思い切って最後までやりとげることをいいます。このような特性や感性を山形の誇りとし、頑張って生きたいと思っております。（談）



十日町にたつ市神

地元山形の村山民俗学会の資料では、「十日町には多くの近江商人の出店があり、彼らは本支店間でえびす講を作っている。十日町の初市にはこれら近江商人が深くかかわったのではないか」と記される。毎年山形名物として賑わう初市は、沿道に露天が並ぶ。かつては、紅花の豊作を祈って、紅花出荷の「紅餅」を花むしろの上に並べて乾燥する形をとり、白紙に点々と水飴を盛った「盛飴（もりあめ）」が縁起物として売り出されていたというが、現在では袋入り「初飴」が売られる。この飴を販売していたのが山十大屋佐藤利兵衛家だ。利右衛門家と同様、紅花商人だったが、昭和になって菓子店となる。西谷伊兵衛、清兵衛家とかかわりがあり、屋号の山十は山大西谷と大十西谷の屋号を組み合わせたものだという

寄稿

伝統的経営理念に学ぶ

三方よし研究所理事　山本　進一

モラルを失った企業

昨今、企業経営者の中で「企業は社会の公器」であるという、企業のあるべき姿を忘れているような気がします。ここ十数年前にバブル経済の崩壊という挫折を味わい、その傷跡が癒されないまま、金にモノをいわした強引な企業買収や、マネーゲームの様相を呈した証券取引の横行、さらには有価証券虚偽といった経済的な犯罪にいたるという企業の不祥事が相次ぎ、相も変らず倫理観のなさが浮き彫りになりました。

企業経営者たちは、戦後、経済的・物質的な豊かさへの過程で多大の貢献をしてきましたが、その反面豊かさと引き換えに経済発展の「負の産物」ともいえる、人として必要なモラルを見失い、心の荒廃現象が、社会問題となってきました。

企業の使命「豊かな社会」の実現

こうした状況の中、企業の社会的責任（CSR）が重要視され、企業のアカウンタビリティ（説明責任）やコンプライアンス（法令遵守）などが論じられ、アメリカナイズされたマネジメント手法がもてはやされています。しかし、わが国では伝統的精神に根ざした取引の倫理観を持っています。これは世界に誇れる経営思想である「商いの心、商道徳」であり、いまこそ見直すべきであると考えます。

利益のためなら、法律を犯さなければ、何をやってもよい。といった考えの経営者が跡を絶たない状況は、経済価値最優先の弊害が顕著に現れている結果であると思います。本来企業は、豊かな社会の実現に貢献することが使命であり、仕事を通じて社会に恩返しする「公の場」であるという意識、すなわち企業の本質は「社会のためにある」という理念をつらぬくことであるはずです。

日本の商人たちは三〇〇年以上も前から、こうした伝統的精神を心に刻んできました。しかし今や、欧米のマネジメントの流入や、グローバル競争にさらされ、日本人は徐々にその精神を忘れていったと思います。そして「商人道」とか「心学」といえば時代錯誤なものと考え、横文字のマネジメントは進んだ経営であるかのような錯覚に陥っています。また企業の不祥事の取り組みやCSRも、仕組みや手続き、システムに偏重していて、最も大切な経営の心や志が抜けているように思えます。

見直そう、伝統的な商いを

わたしたちの郷土の先人である近江商人は、江戸期より、自ら法令遵守を家訓に定め、倫理を重んじ、規範意識をもって経済活動（商い）を行ってきました。その商道徳の根幹には商人（企業）の存在意識という使命感が脈々と流れていました。このことは、現代に十分通じることです。

今こそ、経営の領域に日本の伝統的な商いの心と精神を呼び戻し、その素晴らしさを再確認すべきと考えます。そのことが経済的発展の「負の産物」である精神的な荒廃を克服することに繋がるものと思われます。そして、あらためて「企業は社会の公器」という言葉を噛み締め、心に刻むことが企業経営者だけでなく企業に働く者も含めて求められていると思うのです。

近江商人関連書籍のご案内

『近江商人の鉱山経営
—知られざる鉱山経営の謎—』

駒井正一著
B6判308頁　1600円（定価）

中学で教鞭をとる滋賀県高島市安曇川町の駒井正一氏は、今まであまり注目されなかった近江商人がおこなった鉱山経営について、2年にわたる東北地方への取材によってその実態をまとめ、昨年10月に自費出版された。書店では販売していないので、お買い求め希望者は、直接ご本人へ

著者連絡先
電話・FAX 0740－34－0658

●NPO法人三方よし研究所

近江商人の経営理念である「三方よし」が現代社会の中での生活規範となるよう様々な活動を行っています。詳細は下記事務局までお問い合わせ、またはホームページをご覧ください。情報紙「三方よし」の無償配布および各種講座への割引特典があります。
問い合わせ先　TEL0749－22－0627

●定期購読ご希望のみなさまへ

情報紙「三方よし」の定期購読をご希望の方は、送料など手数料相当分800円分の切手を添えてお申し込みください。なお三方よし研究所会員および賛助会員のみなさまには無償で送付いたします。

★本紙は滋賀県よりの補助金を受けて発行しています。

第31号（第14巻　第31号）■発行／NPO法人三方よし研究所　〒522－0004　滋賀県彦根市鳥居本町六五八　TEL〇七四九（二二）〇六二七　E-mail info@sanpoyoshi.org URL http://www.sanpoyoshi.org